特217

875

NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

三階教に就いて

矢吹慶輝

東方書院

始

特217
875

三階教に就いて

矢吹慶輝

三階教に就いて

矢吹慶輝

三階教は支那で隋代に起り宋の頃まで約四百年ばかり續いた佛教中の珍らしい一宗派であつた。その派の聖典は朝鮮にも日本にも傳はつたが、單に書物が傳はつただけで之を信じ之を弘めた人はなかつた。そして隋から唐までの間に、朝廷から度々禁壓や壓迫をうけた上に佛教各派から誹難攻擊の的とされたので、同派關係の典籍が段々に煙滅し、次第にその歴史もわからなくなつた。こゝに四百年の歴史を有つてゐたといふのは、イギリスのスタイン氏や、フランスのペリオ氏などが、その昔し支那と印度との文化交換の要路であつた、燉煌地方から集めた發掘の古寫本などから新たにその痕迹を辿つてさう推定さるゝのである。

その派の典籍は夙にわからなくなつたが、佛教各派から批評や攻擊のために書かれたものがあつたので、これまでそれ等の間接材料によりて三階教の殘骸を搜つたものは相當にあつた。從つて一部の學者には三階教の一面だけはよくわかつてゐた。しかし金石文に殘つた碑銘や塔銘等を集めると略ゝその歴史もわかるし、又最近發見された同教の聖典などに依ると、三階教は一體何をその主張とし、又如何にその教義を實行したかの重要な部分も判然する樣になつた。拙著『三階教之研究』は、筆者が大正五年六月から十一月までと、大正十一年十二月から同十二年七月との兩度、主として大英博物館にスタイン氏が蒐集した燉煌石室古寫本を渉獵し、傍らペリオ氏が蒐集した同じく燉煌古寫

本を調査し、それにドイツのル・コク氏が蒐集した吐魯番古寫本などからも資料をとり、又日本で永らく、正倉院聖語藏や法隆寺や興聖寺などに保管されてゐたもので、最近漸く世間から知らるゝやうになつた三階佛法四卷その他の資料をも加へて、三階教以外の他派の人々が批評や攻擊のために書いたものでない、三階教の教籍なり記錄なりに依つて、三階教の歷史と教義と幷にその修行などを三部十一篇三十五章に分けて、組織的に叙述したものである。詳細は同書に讓るが、同書は四六倍版千二百餘頁になつてゐるので、いま玆にその要點だけを成るべく簡明、平明を主として壓搾して見やうといふのが本篇である。尤も大正十五年十月一日の『思想』特輯號「佛教思想研究」の中に、「三階教」といふ題で主として三階教の興つた時代幷に思想背景と、三階教に對する古今の批評と三階教史の特異點とを述べて置いたことを附記して置く。

三階教では大體、佛教の全體を、時代から觀察して三階段に分ける。即ち佛の入滅から數へて五百年或は一千年或は一千五百年までは、正法と像法との第一階第二階の時代で、それから後は末法澆季の時代とする。そしてその時代時代に適當な(對根起行)佛教が必要だと云ふのである。この他に佛教を信ずる人(機)から見て、上(一乘機)中(三乘機)下(世間機)の三通りに分け、更に場處即ち現實の罪の世界(穢土)と、理想の清淨界(淨土)との上からも三段に分けて說くので、三階教と謂はるゝものである。しかし三階教といふ名は便宜上、後からつけた名で、三階教徒は「三階佛法」又は「第三階佛法」と云つてゐる。今姑らく佛教の或る見方から宗と教との二文字の使ひ分けをしたのに依ると、世界に宗教は數多ある。それを「教」と名ける。そしてその數多の宗教の中から最高のものだと信じて選擇した

宗教を「宗」と名ける。これによると三階教は佛教の全體を三階段の「教」に分け、その中から第三階の「宗」をきめたもので、「教」からすると「三階佛法」即ち三階教と謂ふべきで、「宗」からすると「第三階佛法」即ち第三階宗又は普法宗と謂ふべきである。この他に「人集教」などいふ別名もあるが、「三階佛法」中の「第三階佛法」のみが、濁れる(末法)時代の唯一適應の佛教だといふのがその根本主張である。要するに、正法像法の前二階の佛教は末法の第三階には間に合はない。第三階末法には「普法」以外に救ひの道がないといふのである。

若しこれまでの支那に於ける佛教各派の根本思想を一口でいふと、倶舍宗は「有」、成實宗は「空」、三論宗は「不」、唯識宗は「識」、華嚴宗は性起の「起」、天台宗は性具の「具」、眞言宗は「密」といふことができると思ふが、それに對すると、三階教は「普」の一字に收まると謂つてもよい。佛も「普佛」即ち普遍の佛を信じ、法も「普法」即ち普遍の法に迎ることをその宗の根本義としたからである。一種の普遍主義 Universalism と謂つてよい。

これだけの主張では何等の珍らしいこともなく、歷朝の迫害を受けたり、佛教の諸派から別に毛嫌ひさるゝ必要もなかつたやうであるが、

一、時は末法、世は澆季、即ち三階教興起の當時を第三階時ときめたこと。即ち末法は經說によると行ひでは破戒無戒、認識(見)では邪見偏見で正しき善き人がないとしてゐるが、この三階教の起つた時代以後はみなさうだときめたこと。

二、第三階時に屬する人々は正しく佛教の戒律を守れないばかりか、正しい考(正見)が起らない。即ち五濁(劫濁、

見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁）の爲に生れながらに汚されて何を考へても偏見を脱し得ない。そこで如何に努力しても精進しても時運の然らしむる所として、戒も見も正しきを得ないとすること。

三、この末法第三階時には普通にあり觸れた佛敎ではいけない。第三階時にふさはしい佛敎即ち第三階佛法、普法佛敎でなくてはならないとすること。

四、第三階佛法とは皮相の佛敎（相佛法）でない本質の佛敎（體佛法）、枝末の佛敎（枝末佛法）でない根本の佛敎（根本佛法）が必要だとしたこと。

五、その本質の佛敎であり根本の佛敎なるものは、生れながらに正しい考へ（正見）を有たないで、その代りに有か空か差別の偏見を有てるものに對するものであるから、人の差別見を淨むるためには、第一に差別の佛敎（別法佛法）でない、普遍の佛敎（普法佛法）でなくてはならないとすること。

六、そこで法華經や華嚴經ばかりが最高の經典で、他はそれより劣つたとする佛敎。或は阿彌陀佛や觀音菩薩ばかりを尊崇して他佛他菩薩を信仰しないやうな所謂「別佛別法」のみを尊ぶ佛敎は、差別見の人々には適當しない佛敎であるとすること。

七、たとひ他佛他經を口に出して謗らないにしても、或る特定の佛菩薩だけを偏信して、他佛他經を顧みないといふことは、間接に他佛他經を輕しめたことになるから、それは謗佛謗法の重罪を犯したことになり、謗佛罪や謗法罪を犯したものが救はれないのは勿論、無間地獄に墮つべきものだとしたこと。

八、今（隋唐時代）行はれてゐる佛敎は、皆この意味で別法の佛法たること。即ち第三階の末法には不適當な（不當

根）の佛敎即ち無効の佛敎だとすること。

三階敎が創開された時は、天台宗も華嚴宗も眞言宗もまだ起らなかつたが、間もなく皆出揃つた。特に阿彌陀佛敎たる淨土敎はこれ以前から行はれたが、唐代から判然と宗旨の形態が整つて來て阿彌陀佛のみを賴ることを敎へたので、三階敎が上述のやうな主張をするので、到底衝突を免れなかつた。そこで三階敎の攻擊をしたものは淨土敎關係者に最も多かつた。

支那では六朝頃にまだ今日のやうな宗派が判然しなかつた。即ち一定の本山に似たやうなものがあつて、敎義は宗乘即ち其の宗だけでの護敎組織の辨證法があり、それと平行して敎會組織が出來てゐて、その制度の中に入らなくてはその宗派の人となれないと云つたやうなものではなかつた。然るに

九、三階敎はその信仰の內容も制度の外形も他派とは別に一定のきまつた一宗派の形を取つてゐたこと。

三階敎は上に列ねたやうな當時としては、他に例のない特定の敎義を振り翳し、其の上、長安の化度寺が本山格であつた。その頃三階敎の寺が幾つあつたかは判然しないが、三階五寺（化度寺、慈門寺、弘善寺、光明寺、慧日寺）の如きは著明のもので、この他の寺にも三階僧がゐて、これ等の三階僧は寺內に三階院を置いて他派の僧尼と同居しなかつた。由來、人に宗派があつても寺に宗派がなかつた時代に、敎義と敎團と兩つながら他の佛敎と別立してゐたことは注意すべき現象であつた。

扨てこの風變りな一派が現はれたのは、要するに末法といふ思想が根底となつたからで、末法には持戒の淸僧は稀であり、又生得的に有つて生れた貪瞋痴の邪三毒から、解放されてるものはないし、その上、自ら高しとして他を輕

んずること、若くは有か空かの偏見から奇麗に足を洗ひ去つてるやうな人はゐないとしたので、

一〇、當時の全佛教を以て、正法像法といふ有効期限を經過した、謂はゞ時効にかゝつた佛教、即ち空券の佛教だとしたこと。

即ち當時の全佛教は根本問題たる人間が何かの反省より立發しないで、身分不相當なことばかり云ふてゐる。それは恰も小供に成人のことを強ひてるやうなもので、その器に不相當なことをしてゐるから、いくら努力をしても解脱の目的を達し得ないものだとした。その上、竿頭一歩を進めて、

一一、末法に於ける佛教の維持は普法以外にないとして、當時の一般佛教を以て、佛法を破滅するものだと考へたこと。

詳しく云ふと「法住」即ち佛教が世に行はるゝためには、それ〴〵時期によりて差別がある。今、末法時代には普法によりて佛法を維持するより外に途がないのである。それに依然別法を說いたり行つたりしてゐることは、取りも直さず佛教の破滅を計つてゐるやうなものだとした。

こんな風であつたから、佛教の一派でありながら、佛教各派の仲間外れとされたのも當然のことであつた。しかし、何時でも又何處でもさうであるが、時流に超然として行ひすまし清僧派と、世間の權勢と結びついて教勢を張らうとする一派とがある。假りに後者を世僧派と呼ぶことが出來れば三階教はこの世僧派ではなくして清僧派であつた。勿論、四百年の歷史の中には、三階教徒で僞經を作つたものがあつたり、本山たる化度寺から財寶を盜み出したやうなものもあつたし、又長い間には主張や制度にも變化があつたやうであるが、全體からすると三階教籍に言つてる通り

在家としては「官職」に就かず「斷事人」(裁判官)とならず、僧侶としては「寺主」とならず「人主」とならずなどと云つてるやうに、末法の濁つた心のものが、他を裁くやうな位置に就くことを誤つたことゝしたから、世僧派ではなかつた。そこでこれが佛教内で、單に世捨て人の修道團だけで終れば問題はないわけだつたが、かゝる教義を傳道した場合に世の治安に如何なる影響があるか。末法には人々の考へも行ひも正しくない。然らば政治はどうか。由來、當時の支那のやうな專制政治の行れてゐる時には「書生の横義」は實に政治の妨害である。既に正しからざる政治の行はれてゐるといふ批評だけでも邪魔であるのに、三階教は更に進んでどんなにしても末法に正しかるべき政治が行はるゝ筈がないと云つたやうである。これではその儘にして置くわけには往かなかつた筈である。即ち

一二、三階階教が隋唐の間に度々壓迫を受けた理由の中には、上に記した諸項の理由からして、佛教内部から反對のあつたことの外に、かうした事情から、時の爲政家から嫌はれたのではなかつたらうか、

いろ〳〵複雜な事情もあつたやうだが、『三階佛法』四卷の中に隱見してゐる主張には、末法に正法治化の政治なしといふ考へがあつたから、それで三階教籍の流行禁斷といふことが、歷朝壓迫の主眼であつたやうに思はるゝ。

勿論、三階教に對する禁壓或は壓迫は、必ずしも同一動機からばかりではなかつた。武周朝の迫害は佛僧側からの反對が主であつたやうだし、又武周朝に反對した越王貞が三階教の信者であつたし、尙仔細に調査すべき點もある。又玄宗朝の迫害は、後に述べる無盡藏院の禁止から始まつた。

一三、無盡藏院が天下の財寶を集めたことが、當時の社會にいろ〳〵の弊害を惹き起したこと。

も迫害の理由の一つであつたが、

一四、三階僧が三階院に別住して他の僧尼と交通しなかつたこと。

も亦その理由の一つであつたが、同時に玄宗朝に志を得なかつた睿宗朝の昭文館學士等が三階僧、師利の僞經製作に助力したやうなこともあつた。併し隋文帝の開皇二十年の禁壓からして、則天武后朝にも玄宗朝にも、皆、『三階佛法』等の同教教籍を禁斷してゐるから、

一四、三階教籍が佛教としても亦治安の上からも、不都合だとされたことが主なる理由であつたこと。

全體、佛教は比較的迫害を受けなかつた宗教である。佛教が印度を出でゝ、異つた國境に入つた時、多くは歡迎を受けた。少くとも現存の史傳上に明かなる限り、異邦への傳道に迫害を受けたことがなかつた。勿論、印度でも支那でも排佛毀釋はあつたが西洋に見るやうな迫害や宗教吟味は見ることが出來なかつた。特に眞面目な求道者は假令、異端異流であつても直ぐに破門や咒逐に處せらるゝやうなことは稀であつた。又支那でも三武一宗の法難のやうに佛教全體を壓迫したことはあつたが、特に一宗派ばかりを迫害したことは殆んどなかつた。但し日本では平安末期以後、これに能く似た迫害があつた。

以上の諸項目は主として、支那の隋唐間に一新宗派が起つたことに就いて、當時の教界に如何なる反響を齎らしたかの、烏瞰圖を描いたに過ぎないが、更に一般宗教史として觀察すると、宗教迫害史上の興味ある一面の外に、

一五、そこには宗教哲學上の根本問題が横はつてゐる。

こゝに宗教哲學上の根本問題といふのは、神と人との關係問題で、神と人とは同質か異質か、若し神と人とは同質とせば、その區別は神性の可能狀態と神性の實現狀態との差異に過ぎないのか。若し又異質とせば神と人間とはどこ

で結合せらるゝのか。一部は同質大部分は異質とすべきか。抑も亦宇宙は一元だとすれば人がなぜ神を離れたのか。或は神がしたとしても人がしたとしても、離るべからざるに離れるやうにした或はなつたのは何故か。それは哲學の問題としては一か多かとの問題となる。神と人とが同じだとしては、事實宗教上の努力が起り難いし、異つたものだとしては人が神に達する途が甘く說明がつかない。これらの問題に對して如何なる汎神觀乃至は神人を同格と見る宗教でも人そのまゝ神だ佛だとするものはない——さうしては、人が神を拜むのではなくして、神が神と相對することになるから宗教的關係が成り立たない。又如何なる一神教や乃至神人を懸隔と見る宗教であつても、人間が生れつき神には近寄れない隔絶のものとするものはない——それでは又宗教的關係が成り立たない。これ等の問題を背景として三階教を見ると、興味ある一面を展開してゐる。それは

一六、三階教の佛陀觀が極端な汎神觀に立つてゐるといふこと。

是である。卽ち第三階の生得的差別見のものは、佛に嫌惡は勿論、信否の區別を設けてはならないといふ普法の考へから、一切の諸佛、幷に諸佛の候補たる菩薩は、皆平等に信仰しなくてはならないとした。その上、佛や菩薩は衆生(人)を救ふためには始終應化身を現はして、種々なる姿、形ちを取りてこの世に現はるゝものとされてゐるから、それ等の佛菩薩の化身をも——時には人間以下の存在ともなり得る——佛菩薩として禮拜しなければならない。又佛教以外の外道の諸身も、それ等は眞正の佛でなく、現に「邪魔佛」であるが、佛の表れであるかも知れないから、同樣に尊崇すべきである。そればかりでなく、經文によると衆生のすべてが佛性を具へ、如來藏を持つてゐるとされてゐて、その儘、佛性佛であり、如來藏佛である。種ある所にきつと芽がある。されば衆生は法華經に說いてる通り、

將來皆佛になれるのだから當來佛と謂つてよい。さうすると又、衆生その儘が、華嚴經や十輪經に說いてる通り、佛想佛としなければならない。こんな風にして佛敎の佛や菩薩は勿論、佛敎外の諸神も果ては一切衆生が佛だといふことになつた。

そんなら、我々は皆佛であるのだから、宗敎を信じなくても善行を積まなくともよいかといふに、前述の通り末法の衆生に「眞正」或は「眞善」の人がゐないのだから三階敎の信者は他人は佛として尊崇するが、自分は罪惡に充ちたものとして「認惡」で、三階敎が敎ゆる善根功德にいそしまなくてはならないとした。この矛盾に見ゆる敎說が、如何に說明され、如何に實行されたかは、他篇に讓るが、宗敎の一體系としては誠に興味ある說き方と謂はざるを得ない。

一七、三階敎の財產に對する考へとして、佛敎の慈善施與、卽ち六度の中の第一の檀波羅蜜を强く鼓吹して無所有の思想を徹底さした。

自分は乞食して露命を繋ぐが、他に向つては乞食して貰つたものまでを頒與する。その上、自分が貰ふために他の人が貰へなくなる場合には、自分が貰ふのを差控ゆるといつたやうな、徹底した無所有思想を鼓吹した。制度だから搾取をしてもよいといふ考でなかつたことは勿論、權利として他のものを取つて、經濟上の機會均等を期するといふ近代風の思想でもなかつた。義務として自分のものを他人に分ける、人間同志にばかりでなく一切の生類に頒與するといふ主義であつた。この無所有思想の三階敎が、その本山たる化度寺の中に無盡藏院を設けて一般の寄捨を求めたところが非常な財寶が集まつた。そこで則天武后がその眞似をして洛陽に無盡藏院を建てたし、玄宗は詔を發してその寄附を禁止する程の盛行を見たが、一體一方には無所有、他方には無盡藏とは如何なる意味であつたのか。委しいことは他に讓るとして是又興味ある宗敎運動の一つであつたと謂つてよい。それから、

一八、三階敎は普通の支那の佛僧のやうに山林に隱遁しないで、每時も聚落卽ち人の集まる所、特に都會を中心として行はれた。

それは前述の普遍主義の佛陀觀から出たもので、山の中には人間がゐない。佛性佛や如來藏佛や當來佛や佛想佛として尊敬すべき衆生は、山林の中にはゐない。町に出なくては會はれない。敎祖の信行は道を歩いてゐて、僧でも俗でも同じく禮敬したと傳へてゐるが、このやうなわけで、三階敎は民間佛敎の先驅であつた。この他にも、數ふべき特異點を有つてゐるが、これ等の思想を以て日本佛敎を觀ると歷史的には何等の連絡もなかつたに拘らず

一九、三階敎と日本佛敎との間に、平行の思想があり〳〵と表はれてゐる。

これは特に我等に深き興味を與へるものである。こゝに日本佛敎の由來などを說く遑はないが、日本佛敎として印度や支那に見られなかつたその特色を調べると、勿論、奈良朝の本地垂迹說からして日本佛敎の特色を具へてゐたが、佛敎々義の內面から見ると、奈良佛敎は支那から舶來して來たそのまゝの佛敎で、平安朝の傳敎、弘法兩大師からそろ〳〵變つて來たが、正しくは平安末期以後、京都中心の西日本の氣分を表はした、法然上人幷に親鸞上人の新宗と、鎌倉中心の東日本の氣分を表はした日蓮上人の新宗とが、今迄の佛敎史に例のない日本特有のものであつたと謂つてよい。そしてこの三人の宗敎的天才によりて說かれた新宗が

一、末法佛敎であつたこと。

二、今迄の宗派のどれもが、眞に時代に適應した佛教でないとしたこと。
三、佛教の眞髓は他宗では得られないとしたこと。
四、こは特に日蓮宗に當て嵌まるものであるが、四箇格言を始めとして他宗無得道を叫んだこと。
五、自宗以前に興つた諸宗派を當時に於ける時代不相應、卽ち末法時代の無效な佛教としたこと。
六、他宗派の檐を假りて、寓宗の姿を脫して皆別々に一宗派の名乘りを擧げ、教義ばかりでなく教會組織も全然獨立さしたこと。
七、寬嚴の區別はあつたが、皆迫害を受けて、その宗祖は流罪に處せられたこと。
八、佛陀觀も衆生論も舊來の教義を全然は直して來たこと。
九、單信口稱(淨土宗)にしても、信心歡喜(眞宗)にしても、以信代慧(日蓮宗)にしても、「信」を高調して、今迄通りの佛教修行たる戒定慧三學に根本から再評價を企てたこと。
一〇、これ等の新教團が非常に强い結束の力を有つてゐたこと。
一一、歷史的に出來た傳承教權に反抗して經文の自由解釋を取つたこと。
一二、從來の宮廷佛教、貴族佛教に對して民間佛教であつたこと。

餘りに類似點が多いので、『三階佛法』四卷は天平時代から日本に傳はつてゐたから、或はこれらの高僧はこれを見たのではないかといふ疑も起る位である。併し史實と認むべき根據がない。卽ち歷史的連鎖は判然しない。しかし類似平行は上述の通り拒むことが出來ない。尤も法然上人や親鸞上人の教義では、阿彌陀一佛のみを賴りとして他佛を

賴らないし、日蓮上人の宗義では法華一經だけの經題を本尊にとつて他經はとらない。これは三階教の普法と共の根柢からして違つてゐた、別佛別法の佛教であつた。しかしこの根本差異點も形相でなく精神を考へて見ると、これまた非常な似寄りであつたが、今その詳しいことは略する。兎に角、歷史的に連鎖がないのにかうした類似點の多いのはつまり

一九、大乘佛教は思想發展の順序としてかういふ歸結に達すべき內容を具へてゐるものと言つてよからうと思ふ。

支那で三階教の興つたのは第六世紀の末で、それから第十世紀末迄三百數十年の歷史の中で、佛教內部から公然と三階教を異論扱ひにしたのは、先づ則天武后の天冊萬歲元年(六九五)に撰ばれた『大周刊定衆經目錄』が始めで、開元十八年(七三〇)に撰ばれた『開元釋經錄』にも正統佛教でないとして、三階教籍を殘らず『疑妄亂眞錄』の中に收めた。又外部からの壓迫は隋の開皇二十年(六〇〇)から唐の玄宗の開元十三年(七二五)に至る百二十四年間に、前後五回程の勅禁或は壓迫に遭つた。そして中唐の頃には淨土教の懷感が『釋淨土群疑論』の中で口を極めて三階教の非理を鳴らし、信行の主張は「常に聖經と一倍相違す」等と云つた。支那で既にさうした惡評があつた爲め、日本に來ても、佛教各宗派の間で、何か他宗を非難しやうとする場合には、何時も敵手を三階教に擬してゐる。卽ち法然上人が新に淨土宗を開くと南都北嶺の人々から非難を受けた。殊に元久二年(一二〇五)南都興福寺の大衆が、法然上人を罰せんことを朝廷に嗷請した奏狀の中に、法然が念佛ばかりをすゝめて餘行を棄てさするは、三階行者のやうだと云つてゐるし、日蓮上人は又法然上人の念佛卽ち淨土宗が三階教徒の同類だと云つてるし、又禪宗も三階教の一類だといつてゐる。又眞宗のある學者は(龜水了詳)日蓮が三階教に似て居ると云つてゐるし、又淨土宗のある學者は眞宗が

三階に似てゐると云つてゐる。これ等の論者の言ふ所が本當なら淨土宗も、眞宗も、日蓮宗も皆三階敎だといふことになる。日本佛敎が非常に三階敎に似てゐることは前に述べた通りである。

斯くて三階敎は、一般宗敎史としても興味のあるものであり、又佛敎の宗派としては普通のものでない特殊の敎義であり、特に偶然とはいひ、日本佛敎との關係に於いて頗る興味多いものゝやうに思はれる。

前篇は主として敎義中心で、三階敎の特色を述べたが本篇は三階敎の開祖、信行を中心として三階敎史の一面を述べることにする。

三階敎は隋の信行が開祖で、信行は梁の武帝の大同六年(五四〇)に生れ、隋の文帝の開皇十四年(五九四)正月四日に五十五歳で歿した。最初は相州(河南省河北道彰德府)邊で三階敎を宣傳してゐたが、開皇九年頃、詔によつて都(大興卽ち長安)に出て、公然と新宗樹立の旗幟を飜した。そして次第にその敎勢を擴張したものであつた。

信行と他の佛敎諸高祖とを比較して見て、その著しい差異點は、信行に對する批評が毀譽共に兩極端であつたことこれである。信行の門下や信者からは聖者として尊信され、「三賢」だ「十聖」だ「四依」の菩薩だと云はれ、甚しきはその慈悲は釋迦佛よりも勝れ、その知慧は阿彌陀佛にも過ぎて居ると云ふので、佛を普通に「無上世尊」といふのに對して、信行を「有上世尊」と云つたといふ程であつた。要するに信者の眼からはその敎祖を聖者の化現と見做した。然るにその反對者からは信行は多くの人を欺きだました爲に、その死後大蛇となつて、信者は皆その大蛇の口の中に吸ひ込まれたと云ふやうな惡評も起つた。又三階敎は佛敎の異端で、三階敎特有の佛と法と僧との三寶を備へてゐるが、それが畢竟「邪三寶」であるとも云はれた。しかし傳記から見ると、何んと謂つても支那隋唐時代の隱れなき高僧であつたことは爭はれない。

信行は姓は王氏、魏郡卽ち相州の人、その母が久しく子がなかつたので、佛に祈つた所が或る夜、神が子を手にして來た靈夢によつて信行を生んだと傳へてゐる。これがそも〳〵聖者の化身といふ信仰の說明に都合のよいものであ

つた。四歳の時に牛車が泥に沒して牛の苦しむ樣を見て泣いたり、或は母牛と犢の別るゝのを見て悲んだといつてゐるから、幼い時から同情に富んでゐたことを語つてゐる。又八歳の時、書生が信行を試めす爲に、汝の家の姓は何か、又母方の姓は何かと問ふた所が、信行は自分の家の姓は王で母方の姓は孫だといふた。そこで書生はその孫の語呂を捕へてなぜ孫を姓として飯を氏としないのかと詰ると、信行は聲に應じて飯は餓を除くを得ても、飢をとむるわけにゆかないが、孫なれば(子孫があれば)飢渴共に除き得るから、それで孫を氏として飯を氏としないのだと云つたと傳へてゐる。幼にして悧潑であつたことがわかる。

後ち出家して廣く經論を研究し、常に時代に適應した宗教を求めた。傳文に「時をもつて教へを勸へ、病を以て人を驗す」と言つてゐるが、時を以て教へを勸へるは時代に適應したる宗教を要求したことであるし、病を以て人を驗すは所謂、應病與藥の意味で、如何に教理が深遠でも亦高尙でも、時代と人とがその教に適應しないものでは如何ともすることが出來ないと云ふ考へであつた。末法の時代には末法相應の佛教でなくてはならないとして、第一第二の正法像法の時代でない、末法第三階の佛教は普法でなければならぬとしたのがそれであつた。その標準で佛教を見た爲に、當時の佛教界では、色々の學派が樣々の教理を說いたが、信行はそれに滿足することが出來なかつた。後ち相州の法藏寺で具足戒(二百五十戒)を捨して親しく勞役に服し、上は敬田卽ち三寶を敬ふと同時に、下は悲田卽ち世に賴りない弱者を惠んだ。信行の歿した後四年目に出來た、歷代三寶記には信行が道路で男女に會ふと率ね皆禮拜したと傳へてゐる。これは法華經に、常不輕菩薩がすべての人々を見る每に、それ等の人々は皆將來、佛になる方であると云ふので一々拜んだと云ふ經說に據つたものである。前に述べた普佛思想の一として一切衆生は皆佛性を持つてゐるから、佛性の上から見れば佛であるとして拜んだものである。具足戒を捨したといふのも、人々を佛と見てはそれ等の人からの供養を受けて生活することが出來ないからで、この具足戒を捨した爲め、僧衆の中に入つた時、信行は具足戒を受けた比丘卽ち大僧の下に座し、沙彌の上にゐたといふことである。信行は生涯、頭陀行を修し、乞食によつて露命を支へ、一日一食だつたと傳へてゐる。信行が隋文帝の勅招によりて都に出たのは、恐らく隋朝の統一が出來た後であつたらうと想はるゝが、都に入ると、先づ當時、隋朝の功臣であつた高熲が深く信仰に歸依して、自分で立てた眞寂寺內に居らしめた。信行はこゝで四十餘卷の教籍を撰んだ。勿論、成書となつたのはその弟子等が師匠の口授を筆受したものであつたが、數多の教籍を撰述して判然と一派の獨立を宣言した。そして都に化度寺、光明寺、慈門寺、慧日寺、弘善寺等と云ふ三階教の寺院を置いた。これ等の三階院は晝夜六時にお勤めがあり、餘程嚴格な修道院であつたやうである。信行は晩年病氣になつて、臨終が近づくと、つとめて佛堂に入つて佛像を觀じ、衰弱が甚しくなつてからは佛像をその房中に入れて臥しながら逝くなつた。それが開皇十四年の正月四日であつたので、この日は後ちになつて三階教徒の最も大切な年中行事の重要日とさるゝやうになつた。卽ちこの日に信行の亡くなつた眞寂寺、後ちに改名して化度寺となつたが、この寺で盛んな施物をなすことが流行するやうになつた。又死んだ場所は化度寺であつたが、正月七日に屍を終南山鵄鳴の阜に葬つて、其處に碑を建てた。それが後ちに三階教徒にとつて重要な聖地とさるゝことゝなつた。卽ち三階教の信者は死んだ後ち皆この信行の廟所に葬られたゝめに、唐大歷二年(七六七)の頃、百塔寺といふ寺號が出來て、現にそこに塔が殘存してゐる。又百塔といふ名に表はれてゐる通り、夥だしき三階教徒の塔碑があつて、其の重なるものは現に歷代の金石錄を賑はしてゐる。

信行の傳記は上記の歴代三寶記に略傳があるし、又信行歿後五十二年に撰ばれた道宣の續高僧傳には稍〻詳傳が載つてゐる。しかし恐らく信行の寂後、直ぐ弟子の裴玄證が撰んだと想はるゝ碑文が現存してゐる。それによると信行のなくなつた時の信徒の感情を述べて、

慧日重雲に翳れ、口燈長夜に沒し、世間の眼滅を嗟き、聖道の梁摧を痛む

といひ、又

遠く天竺の名僧を悲ましめ、近く王城の貴族を歎かしむ。（中略）有識無識、盲の道を失ふの哀みの如く、若しは見、若しは聞くもの、子の親を亡ふの痛みの如し

と形容してゐるから當時非常に尊信されたことが想像される。三階教は佛教内部からは嫌はれものであつたが俗人の信者からは餘程尊ばれた。こゝに近くは王城の貴族を歎しむと云ふてる中には、隋朝の功臣であつた高熲の如きも其の一人であつたと思はれる。高熲は隋書に「齊居讀經」と云つてゐる程佛教の篤信者で、其の妻の賀拔氏も亦同樣に篤信者であつた。開皇十四年に建てられた積善尼寺はこの賀拔氏がその別第に建立したものであつた。信行の住所であつた眞寂寺が高熲の建立であつたことは前に述べた通りである。この眞寂寺が後に化度寺と改名されたのは、三階教の教化が廣く行はれたためであつた。全體、隋の文帝開皇二年（五八二）、長安に大興城を築いた時その新都計畫の長官は實にこの高熲であつたので、信行はこの高熲を信者に持ち、化度寺の外にも、三階寺院を有してゐたが、餘程の便宜を得たものらしい。

全體信行は幾歳頃に三階教を首唱するやうになつたか。それは判然しないが、今日珍しく信行自らの遺文が傳道書簡の形式で殘つてゐる。それによると、信行の三階教開宗は凡そ四十歳以後のことゝ思はれる、開皇七年正月十日に相州廣嚴寺で、州知事に送つて朝廷に奏聞を請ふた書簡によると

開皇七年正月十日、相州光嚴寺沙門信行、白二州知事檀越一、信少小患心勞損、由レ是不レ堪二坐禪一亦不レ堪二講誦一、自從二十七一以來求二善知識一、至二今四十八歳一積滿卅二年、唯得二相州光嚴寺僧慧定一、相州嚴淨寺僧道進、魏州貴鄉縣黨孫浪彪下王善行、趙州瓌陶縣黨王鳳邕下王善性等四人一、誓願頓二捨身命財一直到二成佛一、修行上事相續不斷、此既有下助二王國一饒中益群生上、乞爲二奏聞一賜レ垂二聽許一謹白

と云つてゐるが、十七歳から善知識を探し求めて開皇七年（五八七）四十八歳まで、三十二年の間に、始めて「頓捨身命財直到成佛」の體現者を見つけ出したといふのである。又開皇三年に同じく相州光嚴寺で書いた遺文にも

爲二過去未來現在皇帝陛下×××諸師父母乃至一切衆生一、頓二捨身命財一屬二十六種常樂我（淨）等一切法一

といつて十六種の施法を擧げてゐるが、之れは要するに佛法僧の三寶と衆生との外、食器、衣服、住居、燈燭、柴炭、洗濯等の十六行に通じて無盡の施行を行ひ、日日不斷、成佛まで續けると云ふのである。施行は大乘佛教の修行の眼目であるから六波羅密の第一位、四攝行中の首位にある。この大切な布施行を世界（法界）のあらん限り生きとし生けるもの〻（衆生界）あらん限り、常行相續の無盡藏法に依つて直到成佛の理想を達しやうとするのである。そこで信行の碑文に「身血肉を捨てゝ無上道を求む、生施死施大士苦行の蹤有り、内財外財至人爲善の跡有り」といつてゐる意味も判然する。從つて先づ信行はこの無盡藏行の體現者たらんとしたものである。又この慧定等の四人もこの修行

をしたものと推定さるゝ。開皇三年(五八三)のこの十六種常樂我淨無盡藏行幷に開皇七年(五八七)の信行の告白から推して、三階教の開宗は開皇の初めであつたと想像さるゝ。彼の無盡に關係のある化度寺の無盡藏院はこの無盡藏行を鼓吹したから起つたものであつた。かうした理由で信行の歿した忌日、卽ち毎年正月四日に施しをすることを最も功德のあるものとした。

同じく信行の廟所たる百塔寺に、數多の信者の墓が出來るやうになつたのも、矢張りこの無盡藏行の一つの現れであつた。卽ち教祖信行は無盡藏行を體現した理想の聖者(一乘菩薩)であるから、その聖者と同行の人は勿論、隨喜(贊成)するもの又は見聞するもの、皆悉く無盡藏行の光のうちに包まれて、疾く理想が實現さるゝものとしたからであつた。三階教の教籍に蛇は眞直でないが、竹筒に入れると眞直ぐになるやうに、所同が正しいから能同も又正しいと解釋してゐる。要するに聖者信行の側に葬られると、それで無盡藏行が完うせられるといふ信仰から出たものであつた。

そこで甚だ滑稽な話がある。それは唐の大常協律裴公の妻、賀蘭氏が開元四年(七一六)に四十四で死んだが、三階教の信者であつたので、その臨軀にその病軀を三階教の寺に移し、更に殯を信行の廟所に移した。然るに後ちの金石學者中、三階教の無盡藏行などのことはわからなかつたので、夫のある身で臨終に寺に移したり、信行の墓に陪葬するなどとは、賀蘭夫人が生前に寺僧と何の瓜葛があつたのかなどと言つてるが、それは全くの誤解で賀蘭氏が信行塔側に葬られたのは、決して寺僧と瓜葛などのあつたためではなかつた。

信行の碑文の終りに

於レ是法師淨名、禪師僧邕、徒衆等三百餘人、夙以三禪師一爲二善知識一、三業隨逐二十餘年、俱懷二出世之基一共結二菩提之友一

といつてゐるやうに信行はその在世中に三百餘人の門弟がゐた。このうちには北周の破佛に會つて一旦は山林に隱遁したが、後に信行の勸めによつて山を下つて都に入り、信行の歿後、三階教徒の中心となつた僧邕のやうな高僧もあつたし、又信行が都に上る前、已に信行を知り、三階集錄が未だ書物とならなかつた以前に、その教義を口授せられた本濟や、信行がその人格を敬重してゐた本濟の弟の善智や、又信行の口說を筆錄した裴玄證や、信行のなくなつた後、三階教義を遵奉した慧如等がその重立つた人々であつた。

兎に角、三階教の教祖としてその五十五年の一生涯が、隋唐三百數十年の教史を殘した信行は、偉大な人物であつたことは爭はれない。

三階教史の詳細は、拙著三階教之研究にゆづるが、一度、河北、相州の野に芽生えてから、長安大興の都に花と咲いた三階教は、時代によりて教勢に消長もあつたが、兎に角、四百年に近い三階教史中には、注意すべき事蹟も決して少くはなかつた。こゝには唯だその二三の要點のみを抄記する。

一、三階教は隋の文帝、開皇二十年(六〇〇)に勅によりてその教籍の流行を禁ぜられた。中宗嗣聖十二年(六九五)卽ち則天武后の證聖元年に、三階教籍を異端として僞經の中に收められた。同十六年(六九九)同じく則天武后の聖曆二年、勅によりて三階教徒が違法を行ふことを禁じた。それから玄宗の開元元年(七一三)、勅によりて無盡藏院が毀

除され、同十三年(七二五)三階集錄を禁斷すると同時に、諸寺の三階院に住んでゐた、三階僧が、他の僧院との間に隔障を設けて別居することを禁ぜられた。

かくして前後五回に亙る三階教籍の禁斷幷に同教に對する壓迫があつたので、三階教研究の根本史料が煙滅した。尤も德宗の貞元十六年(八〇〇)に圓照が貞元釋經目錄を編した時に、三階教籍三十五部四十四卷を、公に佛教の正統だとして大藏經に入れたが後になつてそれが全部目錄からすら除かれてゐる。

兎に角、三階教籍は公に流行さするには種々の故障があつたやうである。かゝる事情の下に三階教の研究が佛教內部でも、三階教外の著述には頼れなかつた。それは大抵三階教攻擊の爲に書かれたものが多く、三階教を正當に傳へたものは絕無ではなかつたが、殆んど稀れであつた。從つて三階教の研究には、金石文を始めとして、佛教以外の書籍にその資料が散見してゐる理由も判明することゝ思はるゝ。姑らく三階教史などにしても、三階教以外の佛教各派の史書に傳へられないで、三階教徒が建てた碑文などに依つて多く傳へられてゐるから、一面から見れば三階教史は三階教徒自らが殘した教史であるといつてよい。

二、金石文やその他の資料からすると、三階教は隋唐の間に可なりな勢力を維持してゐたことがわかる。先づ信行の直弟子中には、本濟、僧邕、慧如、裴玄證等がゐたし、唐の武德中の信義、高宗永徽五年(六五四)に寂した僧海、同じく顯慶元年(六五六)に寂した慧了、總章元年(六六八)に寂した道安、玄宗の開元二年(七一四)に寂した法藏、敬宗の大和五年(八三一)に寂した惣靜等は史傳の明かな三階僧であつたが、三階教徒のうちには在俗の信者が非常に多かつたやうである。僕射高熲が信行の信者であつたのを初めとし、僧邕の舍利塔銘は右庶子李伯藥製文で率更令歐陽詢の書である。太宗が位に卽くにあたり大功のあつた蕭瑀は慧了の信者であつたし、高宗時代の王居士、尙直、中宗時代の師亮等も碑文によりてその信者なることが解る。就中、唐の太宗の子たる越王貞は、隨大善知識信行禪師興教碑の撰文者であつたし、その碑を書いたものは當時有名な薛稷であつた。同じく中宗の景龍元年(七〇七)に三階僧の師利が示所犯者瑜伽法鏡經なる經を僞作した時に、薛稷、張齊賢等といふ唐書の列傳其他に名を殘してゐる昭文館學士等十一人が之れに關係してゐる。玄宗の開元四年(七一六)に亡くなつた斐公の妻、賀蘭氏も三階教徒であつた。代宗の太曆六年(七七一)に出來た再修信行禪師碑は于益の撰で張楚昭の書であつたと傳へてゐる。兩京新記の著者が、眞寂寺を化度寺と改稱したのは其の「化廣く行はるゝが故に」と記して居るのと合せ考へて、記傳の明かなるものゝみをとつても以上の如くである。當時に於て重きをなせる人々がその關係者であつた。併しその割合に僧侶の側では學者としても德者としても餘り秀いでた人が傳へられてゐない。兎に角、これによつて三階教は當代名士の外護を受けたことがわかる。

三、三階教は教祖の在世中、既に「京師に於て寺五所を置く、卽ち化度、光明、慈門、慧日、弘善等是なり」と續高僧傳に記されてゐるし、その上、同書に「爾しより餘寺其度を贊承す」とあるから三階五寺以外の寺も亦三階教の影響をうけたことがわかる。例へばこの五寺以外の淨域寺の三階院には見事な「西方變及十六對事實」卽ち觀經曼荼羅の繪があつたので有名であつたし、慈悲寺、薦福寺の如きも三階教に關係のあつた寺であつた。三階僧は玄宗の詔によつても解る通り、一般の僧侶と別居してゐたのであるから、之等の三階寺に居た三階僧も恐らく別居してゐたものと思はるゝ。當時は人に宗派はあつても寺に宗派がなかつたのに、三階僧は三階院に居つて、同じ寺內にあつても他の僧

と別住したといふことは、佛教の宗派成立の上から見ても注意すべき事實であつた。

四、現存の教籍に據つて、三階教團の制規を見ると三階僧が一般の僧侶と同居の出來ない理由があつた。それは三階僧はその教旨によりて、「寺主」となつたり「人主」となつたり、すべて官職に就いたりする事を禁ぜられた。その上頭陀乞食の淨行を守らなければならなかつた。そして乞食で得たる施物の分配に關しては、又特殊の規定があつた。その上、三階教は前にも述べたやうに、普通佛教各派が、ある特定のお經のみを勝れたものとすること、例へば天台宗が法華經、涅槃宗が涅槃經、華嚴宗が華嚴經のみを尊むといふやり方は、他のお經を讀む必要がないといふことになる。間接ではあるがそれは佛經を謗ることゝなり、又同樣にある特定の佛、例へば阿彌陀佛、彌勒佛のみを拜むといふことは、他の諸佛を拜まないことになるから、それは佛を謗るものだとした。そして謗佛謗法では佛教の大罪を犯したものであるから、無間地獄に墮ちるものとしてゐた。即ち教義の上からも實行の上からも彼等は普通僧侶と同居することは出來なかつた。

晩唐に出來た念佛鏡に三階僧は「僧牀に坐せず、僧食を食はず。」又三階僧は「寺に入るを許さず。」其の上、佛像やお經を見ても多く恭敬せず、反つて四生(胎生卵生濕生化生)の衆生即ち禽獸虫魚の類が眞の佛であると主張して居るなどゝ云つてゐる。この書は淨土教の立脚地から三階教を攻擊したものであるから、三階教の主張の全幅を傳へたものとはいはれないが、これによりて三階教は餘程普通の佛教と違つた一風變つた宗派であつたことが知らるゝ。

五、三階教ではその教義上、ある特定の佛や經のみを尊崇しないで、あらゆる佛と經とに歸依することを普法普佛の佛法と稱へた。然るにその普佛の意味を敷衍すると、先づ形像に表れた普通の佛體、お經に說いてある眞の佛を尊むことは別に變つたことではなかつたが、佛は衆生濟度のために、色々な應化身をなすものとされてゐる。例へば觀音の三十三身示現の如きは、いつもやさしい觀音の姿ではない。さういふ種類の佛菩薩の化身を邪魔佛と名けた。その上佛教以外の異學異道の人々が尊ぶ諸神諸尊も、これ亦邪見の衆生の見てゐる佛だとして邪魔佛と唱へた。このやうに拜む佛の範圍を擴げた許りでなく、更に進んでは一切衆生は如來となるべき可能性を具へてゐる、即ち如來藏を有つてゐるから如來藏佛だとした。又同じく一切衆生は總べて佛になるべき性質を具へてゐるから、佛性を具へてゐるといふ上からは、佛と見做すべきだとして佛性佛だとした。それから一切衆生は當來に於て佛になるといふ意味からは當來佛だとし、又更らに一切衆生に對しては佛の想ひをなせとお經に說いて居るから、一切衆生は佛想佛だとした。この如來藏佛、佛性佛、當來佛、佛想佛を普法普佛の四佛といつてゐる。上の念佛鏡が、三階教では四生の衆生を眞佛だとしてゐると傳へたのは恐らくかうした教義の一面を指摘したものと思はるゝ、兎に角、三階教の佛陀論は普通の佛陀論と違つてゐる。三階僧は普通の佛教寺院に居られなかつたが、さりとて山林の中に閉ぢ籠ることをしなかつた。それは山林に籠居してゐてはこの普法四佛を拜む機會がなくなるからであつた。即ち人の多い程、普法四佛の禮拜をなすに都合がよかつたからである。從つて三階教の寺院は百塔寺を除く外は大抵聚落(町)の中にあつた。三階教の教籍に、第三階の佛法即ち三階教の實行者は山林に居てはならない。聚落に居るべきであるといつてゐるのがそれである。此の他に列擧すべき三階教の特色は他に數多あるが、三階教の何物たるかは略その輪廓を描いたと思はるゝから他は拙著、三階教之研究に讓ることにする。(完)

昭和九年九月十二日印刷
昭和九年九月十五日發行

日本宗教講座
第九回配本

東京市淀橋區一ツ橋通町二
代表者 三井晶史
株式會社 東方書院

東京市小石川區久堅町一〇八
印刷所 共同印刷株式會社
代表者 君島深

製複許不

發行所 電話 東方書院
振替東京六三八四
東京六二二

終